

京鹿子



1月号

京鹿子祭特集号

豊田都峰

心響集 その一

いくびだの刻みあらはに山粧ふ
麓より夕かげの這ひ山粧ふ
雪ばんばとんで命のひぐれ色
雪ばんば払へばひぐれのすりよれる
山茶花の散るは嵯峨野のひぐれ径
山茶花の散り敷くを過ぐ祇王のかげ



柿紅葉表にかへし晩学す
黄落のひとすぢのみち晩学せん
夕茜すすきが原の丘めきて
山遠く暮れてすすきの暮れなづみ
すすき原月夜の曲を編みもして
四五本の月光こぼすすきの穂
丘ひとつすすき月夜となりゐたり

『俳句界二月号』「里山抄」十句掲載

—丸山佳子作品—

千兩の實

丸山佳子



さゝ鳴きにけふの一善こゝろざす
塵箱にすてゝも千兩の實は眞紅
短日の女の胸に針きらと
餅焼いて愛する人はひとりよし
扇雀のまぶしきまでの春着縫ふ

秀華採集

水の影より失せ易し糸とんぼ

金子 野生

たいへん存在感の薄いものとの組み合わせにより「糸とんぼ」の存在性を表出している。そしてポイントを「失せ易し」としたのはよい。

鳥渡る大和絵めける山つらね

竹内 久子

みづいろの付箋をふやし秋深む

亀井 福恵

前句の「大和絵」は日本の情趣に富んだ装飾性の手法。一幅の風景を描く。後句の「みづいろの付箋」には一つづつの秋が把握されている。共に用語を評価させてもらった。

鈴鹿 仁

色鳥（後日祭三句）

色鳥の朝のかほする鹿苑寺

北山の風は金いろ照紅葉

初冬の楼閣しかと眼に入れむ

ものこのゑものの影ふゆ十二月

一刻の重さのなかの十二月

近 詠

和田 照海

蝗跳ね


水攻凶容れ攻防の鶉高音

水攻の布陣の狭間蝗跳ね

末枯るる中に紛れて自刃塚

首塚の小草は風に実を結ぶ

もののふのこころを今も遠案山子



神麓集

菊 枕 藤岡紫水

木洩れ日を仰げば通草熟れてをり
行雲流水目つむりて聴く秋のこ糸
菊枕して凡人に甘んじる
幾山河越えて妻恋ふ鹿の声
悴めばもつれもかなし糸の綾

寒 九 竹貫示虹

小寒の尺八抜きし布袋
ダイヤモンド富士の初空ああ日本
燭は寒し分骨の壺掌につつむ
人日の同じどしなる死亡欄
水美しくに大寒の誕生日

松田都青

神様のポケットにある秋の涼
秋寒しまだ火を知らぬ火縄銃
鱈雲先は琵琶湖に触れてをり
秋深し身の内にある隠し部屋
渡り鳥途中が抜けてゐる記憶

こころの隙 北川孝子

山影を山が負ひひる稲架日和
寺目覚むさうらふ文のやうな蟬
支へ合ふこころの隙を萩こぼる
運動会竹馬の友とのめぐり逢ひ
しなやかに退る夕風曼珠沙華

月 餅 丸井巴水

銃弾の速さの魚や水澄めり
団栗の笑ひ涙が落ちて来る
月餅の重さたのしむ十三夜
浜菊の揺れづめ舟が船を引く
影踏みのお娘へ円き月でゐる

小春カフエ 塩貝朱千

伎楽面もの知りがほに奈良晩秋
仮面劇いま月の洞に秋深かむ
円鐘や螺鈿に太古の秋の海
神雪月合掌解かず堂めぐる
小春カフエ事務衣の僧に会釈して

京鹿子大賞受賞作品抄

城陽市

鷺山 珀眉

剥落のだるま大師へ夏旺ん

萩あかりしてたましひの通りみち

名所図絵まつただ中の暑さかな

鳥渡る砲台あとの水溜り

潮どきやはづし忘れの貝風鈴

百も承知二百も合点木の実晴

夕映えの陶器市より柿右衛門

面影はあの日のままに露しぐれ

厄日過ぐ地平に近き星赤き

黄葉紅葉あなたの青も忘れない

新涼のさらさらと竹青きのみ

枯蓮の斯くかくしかじか日の暮れて

白粥のなべ底さわぐ雪おこし

みやしろへさくら三分の待ちあはせ

吊り橋は渡らずしまひ枯尾花

松の尾の古地図の真中亀鳴かす

水掛け論山茶花散つてしまひけり

神将のひとり抜けぬる月おぼろ

ポタージュや湖へ降る牡丹雪

そのあとは枝移りして遅日かな

天平の風の耳うち若菜摘む

いつになく自画像を追ふ夜の新樹

引き算は苦手なんです寒雀

リラ冷えの恋風となりにけるかも

梅東風や小野の岐れの忘れ水

滴りの旅の途中とおもひけり

持ち札はハートのエースバレンタイン

梅雨きのこ不思議の国の親衛隊

掛軸の位置のたしかさ水仙忌

夕河鹿愛の賛歌のその積り

京鹿子新賞受賞作品抄

荒尾市

野口 宗久

仏壇の戸を開け放つ終戦日

帯解けばはらり白萩宵の雨

海の日や万年筆で来る便り

焦げ跡のある流木や初時雨

収穫の小さきを選びて衣被

しぐれたる後の陽射しや海の音

二の腕の心細きや九月来る

竹林を割つて日の差す紅葉かな

前髪に萩一片や躡口

つくばひに逆さ紅葉の利休庭

蠅螂の眼と目が合うて草千里

寄せ鍋のくづるる豆腐吹きにけり

京鹿子新賞受賞作品抄

月ヶ瀬

小谷 知里

蝉しぐれ生きているつて感じする

十六夜や朝会ふ人とすれ違ふ

性格はいたつて真面目草もみぢ

垣間より見る名月は翠色

土用丑の日番茶は熱めに願います

いつまでも若くありたき柚子刻む

二百十日まだのびしろのある手足

冬どなり声帯だんだん細くなる

学ぶものコンパスにして秋暑し

紅葉散るその間際なるひとりごと

こころにも時差のあるやう白桔梗

極月やがらくた市の鉄の馬

京鹿子新賞受賞作品抄

横浜市

兵

泉美

天地を集めて初蝉校舎たつ

秋の日の俯瞰は大利根蛇行かな

嬰泣いて一と日はじまる朝曇

秋夕焼黯々とおく富士一枚

高压線真下に盛る夾竹桃

葉月潮湾を縮める鉄の街

思ひぬしより老父は紳士小鳥寄る

小望月学僧あまた無言なり

テレビ消し花火の遠さ計りぬる

垣もみぢ隣のピアノ上手くなる

お勝手の窓に飛び込む小望月

飛行機の冬三日月の弧にかかる

募集大作賞

大阪市 本郷公子

某氏の書齋

青き踏む雲のカタログ取り寄せて
マシマロのぷるんと揺れて石鹼玉
月の船地球へ銀の糸たらし
星とびて鏡と交信する夜更
ガラス玉青を秘めたる月しづく
青き泉妖精のある夜明けの森
揚羽蝶森のカフエよりの伝言

丸窓の某氏の書齋みむらさき
滴りの一滴語彙の生まれけり
透し彫りの白磁筆筒文化の日
萩すすき素焼きの甕のさざ波す
箱庭や向ひあはせに置く木椅子
旅ごころその切つ掛けはすいつちよ
春愁の日ぐれピエロの見え隠れ
大夕焼埴輪のまなこ透けるまで

双滴賞受賞作品

都峰 三賞

父の日や父の眼鏡をかけてみる

村田あを衣

被写体に風も一役夏帽子

貝路 紅沙

すすき野へ置く一枚の鏡池

辻本 俊子

仁 三賞

眠剤の効くころ蜷舌を出す

吉田 悌子

よく笑ふ嬰よく回る風車

見館 定子

あじさゐや今日は紅茶にジャムいれる

多田 光子

双滴賞

受賞作品

京都商工会議所会頭賞

亀岡市 東 珠生

学歴は蛙の学校 棚田守る

京都芸術文化協会賞

京都市 荒田 義枝

叱られて青鬼灯の中にゐる

京都府知事賞

京田辺市 山中志津子

京都新聞社賞

京都市 菊池 和子

夕焼けを乱切りにして千枚田

万緑の光をにぎる赤ん坊

京都市長賞

京都市 川本 順美

読売新聞社賞

京都市 北村峰月

日向ぼこ埴輪の顔になつている

折鶴を解けば真四角 原爆忌

京鹿子祭賞

福知山市 西村 滋子

毎日新聞社賞

横浜市 佐藤みち子

眠る児の指がほどけて星月夜

夕焼を海に溶かして舟帰る

双滴賞

京都市 井尻 妙子

朝日新聞社賞

奈良市 西原 勝代

母にまだ確かな歩巾十三夜

映す雲くづして進む田草取り

双滴賞

京都市 藤岡 紫水

KBS京都賞

福山市 亀井 福恵

蛇よりも殺めし棒を怖れけり

言葉にもリボンを結びクリスマス

双滴賞

大津市 田畑耕之介

NHK京都放送局長賞

一宮市 魚住 節子

奇数てふ厄介な数メロン切る

昭和の日ドロップ缶より転げ出る

双滴賞

福山市 石原孝人

風花やいつか一人になるふたり



京鹿子集

豊田都峰選

水の影より失せ易し糸とんぼ

青梅 金子 野生

芙蓉萎ゆ没り日のいろを包みては

言の葉を紡ぎ紡ぎて素秋かな
おもかげの人の五十忌月の露地

林檎たわわ杖の力は母のやう

児の悪さ叱らぬ父も敬老日

アリソナ 伊吹 之博

星飛び目指せしものは闇のなか

秋の風ハープ奏者の指の先

鳥渡る大和絵めける山つらね

秋の空ハードル越えた日を記す

京都 竹内 久子

草庵にとどく瀬音やこぼれ萩

人にない喜びもあり異国の秋

山住みの甕に雨溜め秋茄子

暮の秋子の声何処テレビの音

オハイオ 水谷 直子

味噌蔵に天保の札つづれさせ

夜なべの灯昔のはぎれパッチワーク

みづいろの付箋をふやし秋深む

草紅葉悪戯黒栗鼠夕日影

福山 亀井 福恵

唐辛子振れば来世の音のする

錦秋や織りなすみどり幾十なる